

# Kaori Nakano

冬季オリンピックのなかでもフィギュアスケートは花形競技の一つですね。技術的な要素に芸術性や物語が加わり、スポーツを超えた熱気が生まれます。今年も羽生結弦選手、宇野昌磨選手を筆頭に選手ひとりひとりのドラマが生まれ、世界中で感動が共有されました。

競技の印象を左右する要素のひとつに、衣装があります。フィギュアの衣装デザイナーとしてアメリカのスケート界において殿堂入りしているデザイナーに、ヴェラ・ウオンがいます。ウエディングドレスのデザイナーとしても有名ですが、自身は元フィギュアスケーターです。フィギュアの衣装には、演技の邪魔をしない機能性とともに、選手の魅力を引き立てながらテレビ映えもするドラマ効果まで求められますが、ヴェラは自身の経験を活かし、ナンシー・ケリガン、ミシェル・クワン、エヴァン・ライサチエから歴代メダリストの衣装を手がけてきました。平昌オリンピックではネイサン・チエンが彼女の衣装を着ています。

オリンピックで衣装のことが大きく話題に上らないのは、デザイナーや選手にとっては「成功」というのもよいかもしれませぬ。というのも、もっとも注目

を集め、後世にも伝えられることになるのが、「機能不全」を起こした衣装だからです。アイスダンスにおける韓国のミーン選手、フランスのパバダキス選手、それぞれ背中が大きく開いた衣装を着用していましたが、競技中にホックがはずれ、あわや放送事故という事態を招いてしまいました。ともにパートナーがカバーし、堂々と最後まで演技切ったのは本当にすばらし

中野香織

ファッション歳時記  
78

## 衣服の機能不全

かったのですが、当の選手たちにとつては予想外の悪夢であり、二度と「リプレイ」してほしくない瞬間であったことには違いありません。

本人が意図しないのに見えてはいけない部分がほろりと公の目にさらされてしまうことを「衣服の機能不全 (wardrobe malfunction)」と呼びます。2004年のスーパードウルのハーフタイムにジャネット・ジャク

ソンの胸がほろりと見えてしまったアクシデント以来、類似の事態をこのように呼ぶのですが、スポーツの場面では数々の記録があります。フィギュアはもちろんのこと、テニス、ボブスレー、ビーチバレー、レスリング、体操、シンクロナイズドスイミングなど、「びりり」「ほろり」「ばちん」の数知れず。選手にとっては、こんな不条理なできごとで記録に残るのは不覚で不名誉なことですが、しかし、正直なところ、こうした事例から不思議と勇氣づけられることも確かなのです。恥ずかしくて消え入りたくなるような失態は、私だって何度やらかしたことか。気持ちのやり場のない絶望のなかにいるときに、不測の事態の衝撃から立ち直り、前に進んでいく人の姿を見ると、それだけで何か勇氣を与えてもらえるのです。ケガを乗り越えて勝利をつかんだチャンピオンの物語に負けず劣らず、不条理な屈辱感に耐え、次に進む勇者の姿にもまた、励まされる思いがする平昌オリンピックでした。とはいえやはり動きの激しい競技のための衣装は、セクシーさより丈夫であることを優先することにしたことはないですね。

なかの かおり

1962年生まれ 富山県出身 服飾中野 エッセイスト 東京大学

